

# 街道をゆく 善光寺への道



2年 B組

鈴木順夫

## 目次

- 一、宿場町の規模
- 二、善光寺街道の名称と位置
- 三、善光寺街道の宿場町
- 四、善光寺東街道の宿場町
- 五、善光寺西街道と五街道の比較

|    |    |    |    |   |   |   |   |
|----|----|----|----|---|---|---|---|
| 61 | 61 | 49 | 28 | 9 | 9 | 5 | 3 |
| 5  | 5  | 5  | 5  | 5 | 5 | 5 | 5 |

## 一二、宿場町の構造

一三、物資輸送の形態

六、信仰の道とその特徴

七、結論

八、参考文献

九、訪れた施設

|    |    |    |    |    |    |
|----|----|----|----|----|----|
| 95 | 93 | 91 | 85 | 74 | 64 |
| S  | S  | S  | S  | S  | S  |

## 一、はじめに

僕の祖父母の家は長野県松本市の村井にある。その家の近くに「村井宿番所」という札書があるのを見つけ、この付近が旧街道の宿場町であったことを知った。インターネットで調べてみると、それは、善光寺街道の宿場町があり、善光寺街道が二つあることを知り、調べてみることにした。

今回の研究テーマは、二つの善光寺街道の性格の違いである。そのため、宿場町の規模

構造、物資輸送の形態の二点を比較し、また、信仰の道としての特徴を考えてみると、ますにする。

## 二、善光寺街道の名称と位置

善光寺街道といふのは、文字通り善光寺へ至る街道であるが、これは、街道の正式な名称ではない。これをふまえ、善光寺街道の名称と位置を明確にしておく。

善光寺街道と呼ばれる道は主に二つある。

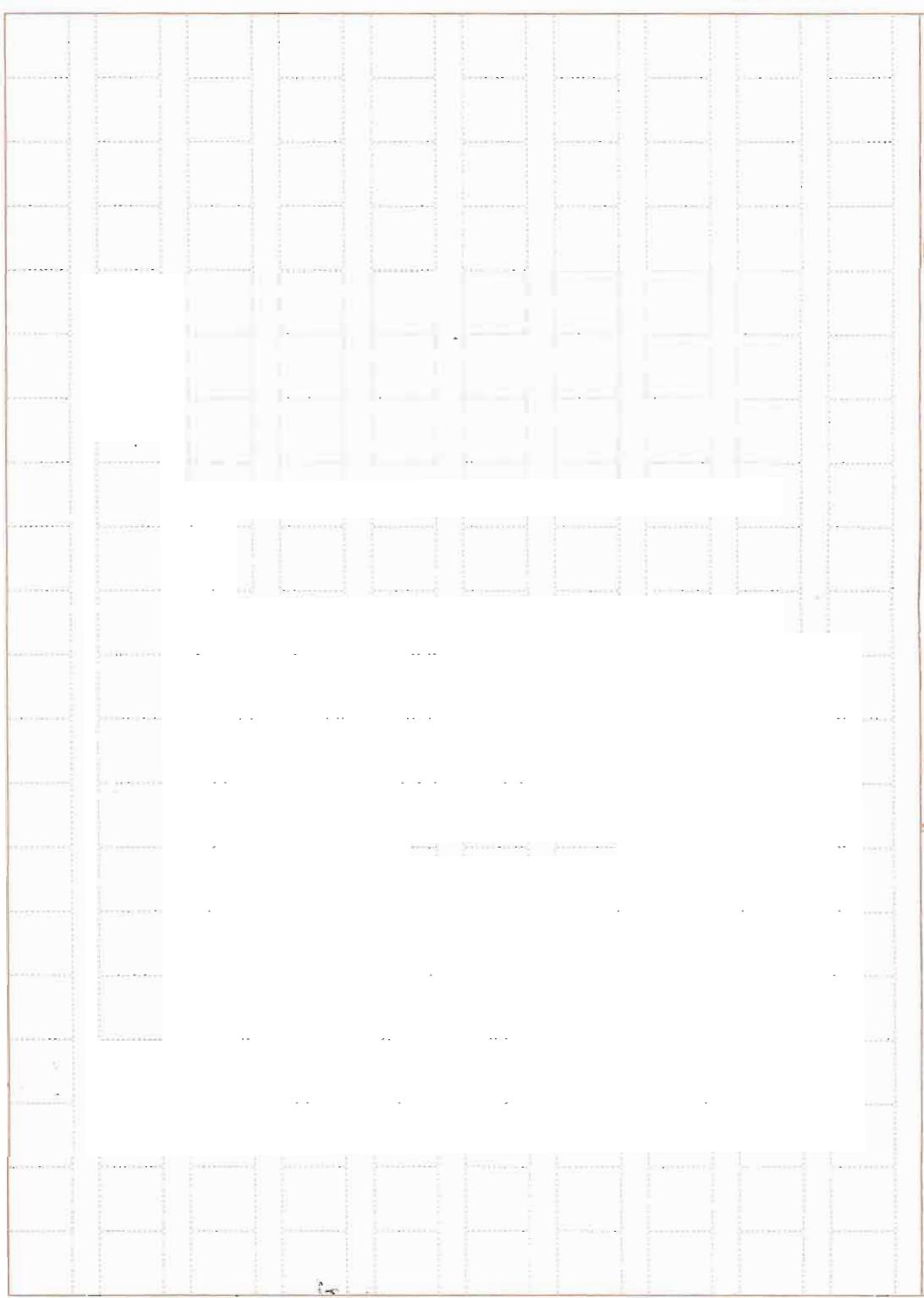
一つは北国西脇往還で、もう一つは北国往還である。北国西脇往還は、中山道洗馬宿から分かれ、松本、麻績を通り稻荷山宿へと抜け道である。北国往還は、中山道追分宿から

分かれ、上田、善光寺、牟礼を通り、越後国へと向かう道である。この2つの街道の位置は図1の通りである。善光寺街道と呼ばれるのは、北国西脇往還と、北国往還の中を追分から善光寺の区間である。

本研究では、この二つの善光寺街道を比較するため、これらを区別して呼ぶことにする。洗馬から稻荷山までを善光寺西街道（図2①）参照）、追分から善光寺までを善光寺東街道（図2②）参照）と呼ぶことにし、北国往還新

町宿から先は扱わないとにする。

8



20 × 20

### 三、善光寺街道の宿場町

二つの善光寺街道の宿場町について、嘉永二年に刊行された「善光寺道名所図会」を参考に説明する。

#### 三一、善光寺西街道の宿場町

##### (1) 洗馬宿

「およそ六丁程相対して巷をなす。諸候交代の荷物目方を改める役所を置き、東海道府中の如し。此駅は吉祖の深山幽谷を分凌ぎ、桔梗原の曠野に出るの始めなり、又

つて木曾の咽喉なりといふ。繁昌の宿駅にして遊女多し。とある。本陣は百瀬氏、脇改める役所とあるが、洗馬宿には正徳二年に置かれた貫目改所があった。貫目改所は、7場所は本陣百瀬家の南側で、間口五間、奥行五間の長板ぶきの建て物で、帳付け、桿取りなどの役人が詰めていた。とある。<sup>2)</sup>また、繁昌の宿駅にして遊女多し。とあり、宿には飯盛女がいたことが分かり、

中山道の宿場町としての特徴を持つていた  
ことかうがえる。

(2) 郷原宿

南北八丁程相対して巷をなす。民家多  
くは中山道妻籠宿の橋場より右へ入り飯  
田の城下へかかり、甲州の元善光寺へ來り  
塩尻宿へ出て此道へ來るなり。とある。し  
たがつて、上方から善光寺へ向かう人は、  
中山道妻籠宿から大笹街道、甲州街道、さ

らには下諏訪から中山道を通り、塩尻宿から郷原宿に抜けたと考えられる。——図③①

(参考) 本来ならば図③②のルートが上方から最短コースである。ただし、郷原宿は相当賑わつていたらしく、多い時には一軒の旅籠に二〇〇人以上の旅人が泊まつたといふ。それを考えると、善光寺参りの道のりは①が主流で、善光寺西街道の起点として郷原宿が賑わつたとも考えられる。

郷原宿には本陣、脇本陣がない。問屋は

上下の二軒あつた。また、宿場町の町並が直線でカーブがないのも特徴的である。

(3) 村井宿

南北六丁余、相対して巷をなす。民家多く町裏に散在す。宿の入口左側に神明の社あり。とある。本陣は中村氏、脇本陣は山村氏で、半月ずつ交代で問屋も務めていたという。問屋場には帳付一人、助郷割り人二人が常勤していたが、公用旅行者の継ぎ立てが毎日あつた訳ではない。物資の継ぎ

立てが毎日あつた訳ではない。物資の継ぎ

立ての口銭を徵收するのが仕事であった。  
 とある。<sup>3)</sup> このことから、村井宿には公用の  
 荷物の流通が少なかつたと考えられる。

村井宿の休泊施設は、旅籠屋が一五軒、  
 木賃宿が七軒、茶屋一六軒、馬宿一軒と他  
 の宿に比べて多い。また、宿の南端には口  
 留番所が置かれ、木曾、伊那、諏訪方面と  
 の物資の出入りが取り締られた。特に、米  
 粟、塩、材木の搬出入と牛や馬の通行が改  
 められたという。

(4) 松本宿

松本は、小笠原氏の居城である松本城の城下町である。松本宿について、城下の町広く、大通り十三街、町数およそ四十八丁。商家軒をならべ、当国第一の都会にて、信府と称す。相伝う牛馬の荷物、一日に千馱つけ入りて、また千馱つけ送るとど。實に繁昌の地なり。とある。一馱とは馬一頭分が運ぶ荷物のことと、松本宿には馬千頭分の荷物が出入りしていたことが分かる。

た、「信府」とあるように、松本宿は、野麦街道、塩の道である千国街道の起点でもあり、交通の要衝であった。つまり、松本は、城下町として、交通、物資流通の中心地として発展したことが考えられる。

本陣、問屋は本町の倉料氏が務めたが、中町にも塩や魚などの物資を改める問屋があつた。また、脇本陣は本町、中町、東町のしかもるべき旅籠が務め、正式には定められなかつたという。

(5) 岡田宿

「四丁程相対して民家多し。出放れに婦人を改る番所あり。松本より置かる」とある。<sup>11)</sup> 岡田宿は江戸から保福寺道を通り松本城下に入る直前の宿場町として重要視されたといふ。また、岡田は松本藩領と幕府領の境界であつたため、北端には柵形や番所が置かれた。番所とは、白木、麻、穀物、塩など荷物や、婦人、馬の通行を取り締まつたといふ。

岡田宿では、本陣、問屋を所氏が、  
陣を橋爪氏が務めた。旅籠屋は木賃宿を含  
めて十軒、茶屋は六軒と休泊施設の数は少  
ない。これは規模の大きい松本宿に宿泊客  
が集中したこと、近くに浅間温泉があつた  
ことが理由として考えられる。

### (6) 剣谷原宿

三町程相対して巷をなす。會田宿へ一  
里十丁、反町村板場鳥居出を過ぐ、會田宿  
にいたる。この辺は、山間の小邑なれば、

すべての風俗賀朴にして、堅実なる山賊のみ多くつどい、諸国より善光寺へ来る旅人引きもきうす。粟の強飯をもつて川谷原の名物とす。<sup>1)</sup> とある。本陣、脇本陣は中沢氏が務め、上下の問屋も兼ねた。上問屋には貰目改所も置かれたといふ。宿場町の南側には仇坂の異名をもつ刈谷原峠があり、延喜年間（平安時代）におかれた官道の駅も設けられるなど、古くから交通の要路であつた。

## (7) 会田宿

フ七町程相対して巷をなす。 (中略) 亂  
 橋まで一里十二丁、この間立峠の登り三十  
 丁、下り十八丁の峻路なり。北東に虚空蔵  
 山見ゆる。則、會田小次郎廣政の古城地なり。  
 とある。上問屋は堀内氏、下問屋、脇  
 本陣は横内氏が務めた。本陣は、文化年間  
 以前は横内氏、以後は堀内氏が兼ねた。ま  
 た、会田宿の北には善光寺西街道最大の難  
 所ともいわれる立峠があり、そのためか旅

籠屋は十二軒、木賃宿四軒、茶屋五軒、馬

牛宿三軒と休泊施設は比較的多い。

(8) 亂橋宿

7間の宿とす。四丁程相対して巷をなす。

とある<sup>11)</sup>。間の宿のため本陣、脇本陣はなく、旅籠も数軒しかなかつた。

(9) 西条宿

善光寺道名所図会には法橋とて書かれ  
ており、7間の宿なり。法橋は西条村の小

名にして、四丁程相対す。

(中略) 未申の

山に古城地あり。<sup>レ</sup>とある<sup>ミ</sup>。間の宿のため正式に定められた宿泊施設はなかつたが、通称本陣と呼ばれ、幕府の役人などを泊めた茶屋があつた。

(10) 青柳宿

「五丁程相対」<sup>レ</sup>と巷となす。麻績宿へ一里十丁なり。<sup>ミ</sup>卯の方の山に青柳氏の城趾あり。<sup>レ</sup>とある<sup>ミ</sup>。青柳宿は、青柳城の侍屋敷町を転用したものであるといふ。また、急な傾斜地に立地してゐることもある<sup>ミ</sup>。町割が

画一的になかつたといふ。

図4に青柳宿の

町割を表した。郷原宿(図5)、川谷原宿

(図6)、会田宿(図7)の町割と比較す

ると家の大きさが不整全であることが分か

る。

青柳宿の本陣、問屋は青柳氏、脇本陣は藤屋が務めた。また青柳宿の先には切通しがあり、大切通一は長さ十五間、幅九尺、小切通しは長さ二間一尺、幅九尺であった  
といふ。これ一切通一が造られたこと

に上つて旅人ならびに牛馬の往来、いざさ  
かが煩らわしき事なく、野を越え山を越え  
て麻績宿に到る。とあり、<sup>レ</sup>峠を越えるのと  
比べていかに通行が樂ひあつたか分かる。

### (II) 麻績宿

六町程相対して巷をなす。その余町裏  
に散在す。<sup>レ</sup>とある。<sup>リ</sup>本陣は白井氏が、上問  
屋、下問屋はそれぞれ岩渕氏、芦沢氏が務  
めた。松本藩領の宿場町は麻績宿まで。  
猿ヶ馬場峠の先は松代藩領であった。  
その

ため、宿場町の東端には口留番所が設けられ、松代藩領との交通を改めたといふ。また、宿のはずれには信濃三十三番札所のひとつである法善寺がある。

### (12) 桑原宿

善光寺道名所図会には桑原宿に関する記述がない。他の文献には、「桑原宿は正式に善光寺道の宿駅として指定されたものではなく、いわゆる間ノ宿といわれるもので、本来ならば茶屋などはあっても旅籠等は許

可されるものではなかつた。しかし善光寺道の難所の一つである、猿ヶ馬場峠は箱荷山宿から麻績宿まごの三里の道法があることと、峠の北麓にあたるとこうから、いつの間にか宿の性格を持つようになつたものが「ある」とある<sup>3)</sup>。桑原宿は間の宿であるが、松代藩には宿として認められており、伝馬役も負担していた。また、松代藩主も元治二年には桑原宿に宿泊したといふ。本陣は正式ではないが柳沢家が務めた。

(13) 稲荷山宿

フ八町程相対して巷をなす。丹波鳴宿へ  
三里、松代へも三里なり。この宿、中央左  
に高市太神といふ立石あり。一ヶ月に九ヶ  
日市立あり。商人多くして、家数およそ五  
百軒程あり。繁昌の地の問屋松本完司と  
いう者は、宅地五町四方御除地なり。とあ  
る。繁昌の地とあるが、旅籠屋は初期  
には三十軒程あつたが、篠ノ井追分宿や桑  
原宿ができると旅人を奪われてしまい、天

明五年には五、六軒にまで減つてゐる。

しかし、その後は再び栄え、商店が賑わつたといふ。また、脇本陣はなかつたが、本陣は松木家が務めたといふ。

三一二、善光寺東街道の宿場町

### (1) 追分宿

善光寺道名所図会には追分宿に関する記述がない。追分宿は天保十四年には、本陣が一軒、脇本陣が二軒、問屋が一軒、家数

一〇三軒、人口七二二人、内男二六三人、

廿四四九人、旅籠屋が三五軒である。このことから、宿場町の家の三軒に一軒が旅籠屋であること、女より約二〇〇人も多いことが分かる。これらの多くは、旅籠屋に雇われていた飯盛女である。「文化期には旅籠五十三軒の内、四十三軒が飯盛女を置いていた。残る十軒は安旅籠である」とある<sup>4)</sup>。つまり、追分宿は、他の宿場町に比べて飯盛女が多いため、繁榮したと考えられる。

## (2) 小諸宿

「城下の町凡二十五、六丁相対して巷となし、猶小路多く、家數千余、是より十八丁脇に小諸村といふあり。其村より出一小諸なり。大井の庄、長倉の里といふ。此辺は浅間山の腰を巡る街道にて、上田辺より次第に爪先上りにて、右裏通は千曲川の急流なり」とある。<sup>1)</sup> 小諸宿は小諸城の城下町であり、傾斜のきつい坂の町である。本陣と問屋は上田家が、脇本陣は桑屋が務めた。

う  
4)

小諸宿には、善光寺東街道の関門として番所が置かれたといふ。古代東山道の官道の駅があつたこともあり、古くから交通の要路であつた。そのため、小諸は、信濃国東部地方第一の藩として地の利を得て、江戸からの物資が運ばれ、次第に商業が発達し、江戸中期には東信随一の町となつた。また酒、醤油、味噌、酢などの醸造業も盛んで、製品が各地に売りさばかれた」とい

## (3) 田中宿

この町ハ丁程相対して巷をなし、民家  
 多し。間の宿とす。これによつて海野と田  
 中は半月代りに宿役を務るなり<sup>1)</sup>とある。  
 慶長年間に開設され、寛永二年からは、田  
 中宿の補助宿として開設された海野宿と駅  
 次の任務を半月交代で務めた。しかし、寛  
 保二年の大洪水のために宿場町は壊滅的被  
 害を受け、宿場と1つの機能はほとんどが  
 海野宿に移された。そのため、宿場町と

として再開後は一間の宿とす。とあるよう

に小規模の宿場町であったといふ。

#### (4) 海野宿

一七町程相対して巷をなす。民家多い。

町中に溝あり。むかし木曾殿の侍守野平四

郎幸氏という者、住居の地なり。田中八十

八丁なり。小坂多し。とある。開設された

当時は補助宿駅として問屋が置かれるのみ

であった。しかし、田中宿が洪水で被害を

受けた後は、それまで問屋を務めていた藤

田家が本陣も務めるようになつた。本陣は宿の中央西側にあり、脇本陣も二軒あつた。また、宿の東端には番屋もあつたといふ。享和三年の記録によれば、伝馬屋敷が五十九軒、旅籠屋は二十三軒、総家数は一〇九軒云あり、本宿と一ノ賑わつていたことが分かる。

また、しなの鉄道や国道十八号線が宿を外れたこともあり、海野宿の町並は現在まで残されくる。昭和六十一年には「日本

の道百選」に、翌年には「重要伝統的建造

物群保存地区」に指定された。

(5) 上田宿

上田は上田城の城下町である。「城下町

長く、一里八丁相対して巷をなし、繁昌の  
地なり。産物には、上田縞袖、縞白袖など  
近在より織出し、城下に之織屋、呉服屋あ

りて、諸国へ送る。また上品の織物を制し  
て一都會というべし」とある(1)。伝馬役の馬

の數は合計六十疋で、北國脇往還の各宿に

定められていた二十五疋をはるかに上回る。これらのことから、上田宿が産業、物資流通においての中心地であつたことが考えられる。図8に、上田宿の七つの町のうち海野町と横町の渡世を示した。総家数一二六軒へのべ一三五軒)のうち、旅籠屋は約一割の十四軒で、他のほとんどが商工業関連である。

その一方で、宿場町としての宿泊機能は少なかつたことが考えられる。海野町と横

町云は旅籠屋が一二六軒中十四軒と少ない  
また、上田宿に参勤交代の本陣を定める大  
名も少なかつたといふ。

(6) 坂木宿

「柳、坂珠とも書す。九丁程相対して巷  
をなす。むかしは葛尾の城下なり」とい。  
。

坂木の郷は、南条、中条、北条と分る。  
南条は今戻宿といふ。中条は今の中の条村な  
り。北条は即坂木宿なり。とある。<sup>1)</sup> 本陣は

宮原家、脇本陣は中沢家が務め、二軒の問

屋も初期は両家が務めた。嘉永七年の記録にされば、六十四軒の旅籠屋のうち二十七軒に約五十人の飯盛女がいたという。坂本宿は「とくに加賀藩主の定宿」とされ、参勤交代のたびに四〇〇人から五〇〇人の家臣が泊まり、一般の旅人も泊まつて貸布団屋があつたほど繁栄した記録がある」という。また、村の中心部にもあつたため、名主や組頭などの屋敷も宿内にあり、宿駅の機能と村政自治の両面を持つていたという。

(7) 上戸倉宿

善光寺道名所図会には、上戸倉に関する記述がない。上戸倉宿は、下戸倉宿と合わせて一宿として機能していた。宿には問屋が置かれ、毎月二十一日から月の終わりまで務めた。問屋は他宿のように世襲ではなく、入札と呼ばれる選挙で選んでいた。上戸倉宿に大名が宿泊することはなかつたものの、本陣と呼ばれる家が置かれ、当初は玉井家が務めたが、後に小出家に譲つた。

## (8) 下戸倉宿

七八丁程相対して巷をなす。立場は有明山の麓にて、姥捨山は西に見ゆる。上戸倉苅谷原右に見乙笄の渡場あり。<sup>レ</sup>とある。<sup>1)</sup> 上戸倉宿と違ひ、宿場町は参勤交代の諸大名や善光寺詣の人々で賑わつたといふ。そのためか、元文九年には一六〇軒、八一四人だつたが、約一〇〇年後の天保九年には二九一軒、一一九四に増えてゐる。

下戸倉宿の本陣は当初は柳沢家が務め

いたが、後に宮本家となる。問屋は東西に二軒あり、東を滝沢家が、西を高野家が務めた。

(9) 矢代宿

「八丁程相対」の巷を以て、との余、町裏に散在して農家多し。この宿、一重山の麓に乙酉浦は千曲川北流す」とある。宿場町の規模は大きい方で、天保十三年の記録云は、家数三七二軒、人口一六三五人、旅籠屋三十九軒である。本陣、問屋を柿崎源

左衛門家、聯本陣を柿崎平九郎家、もう一

つの問屋を松崎家が務めた。矢代宿は佐渡の金荷の宿継ぎや、加賀藩の参勤交代の定期宿であった。そのため、本陣柿崎家の屋敷は広く、南北二十四間（約四十四メートル）、東西四十四間（約八十一メートル）、面積にして千三十二坪半（約三四〇〇平方メートル）あつたといふ。

(10) 篠ノ井追分宿

→ 五丁程相対して巷をなし、  
その余散在

す。間の宿といふ。追分立石の茶屋柳屋に

川中島戦場の因、他に姥捨山絵半切等をひ  
さぐ」とあり。<sup>(1)</sup> 「立石の茶屋」と呼ばれた

柳屋が大繁盛し、川中島戦場の因などが売  
られていたことが分かる。他にも数軒の茶  
屋があり、時々旅人を泊めたといふ。

(II) 丹波鷺宿

「六町程相対一ノ巷をなす。その余町裏  
に散在す。矢代宿へ三里。この辺川中島と  
いう。事は犀川と千隈川との間なればなり。

これより上氷鉾村、北原、南原、芝沢、御  
 弇川、弥勒等の村々を経て、篠ノ井の追分  
 にいたる。右は京伊勢道、左は江戸道にて  
 千隈川を越えて矢代宿に出る。これ北陸道  
 へ出る順路にして、諸候も往来したもうな  
 り。また丹波鳴川支の節は、川下大豆嶋の  
 渡しを涉り可候、峠へかかり、鳥打坂より  
 松代の城下にかかり、西条山の麓を巡りて  
 雨の宮より矢代宿へ出るなり。とある<sup>1)</sup>。丹  
 波鳴の渡しが川上めの際は峠を越えて松  
 代

を通<sup>フ</sup>て矢代宿に抜けた。これは、図9の  
ルートで北国東脇往還と呼ばれるが、雨が  
降<sup>ハ</sup>て丹波嶋の渡<sup>し</sup>が川上めの際に諸大名  
たちが通<sup>フ</sup>た道<sup>みち</sup>もあるので雨降り街道と  
も呼ばれた。

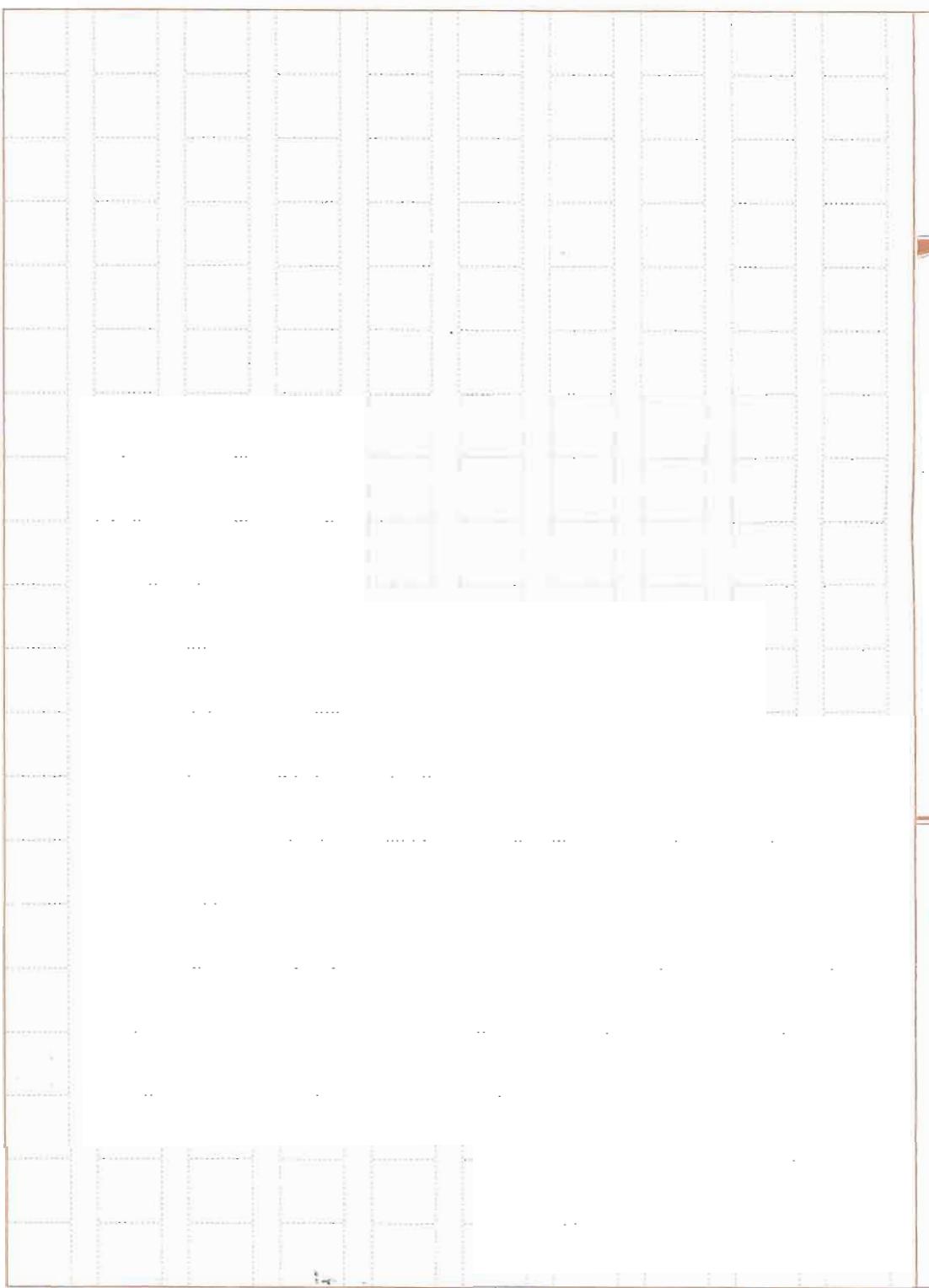
本陣は柳島太郎左衛門家が、脇本陣、問  
屋は柳島市郎左衛門家が務めた。今は数軒  
しか見られないが、多くの家の屋根の上に  
図10のような飾り瓦があつたことと丹波嶋  
宿の特徴である。

## (12) 善光寺宿

善光寺の町には八つの町があつたが、宿駅と二つの機能をもつていたのは大門町であつた。本陣は藤井氏が、脇本陣は白井氏が、問屋は延享三年からは小野氏、嘉永元年からは中沢氏が務めた。大門町には旅籠屋が多かつたのに對し、善光寺宿坊や東立門町では木賃宿の営業が盛んだった。善光寺参拝者は、宿内の約三十軒の旅籠屋や寺内での四十六軒の宿坊に泊まつたといふ。

た、善光寺宿は、門前町、宿場町として、  
けでなく、経済の中心地としても発展し、  
麻、紙、木綿などの集散地でもあつた。

48



20 × 20

#### 四、善光寺街道と五街道の比較

二つの善光寺街道はどれくらいの規模の街道なのか。善光寺西街道と、同じく信濃を通る五街道のひとつである中山道を比較する。

まず、宿場町の規模を比べる。中山道の六十九の宿場町のデータを図11に、善光寺西街道の宿場町のデータを図12に示した。二つの表を比べて大きく違う点は2つある。一つめ

は宿場町の家数に占める旅籠数の割合である。中山道の宿場町全体の家数のうち、旅籠屋は

平均約十三軒に一軒の割合であるのに對し、善光寺西街道では、平均約七軒に一軒の割合である。つまり、善光寺西街道の宿場町は規模の小さいわりに旅籠屋が多かつたといえる。二つめは、本陣、脇本陣の数である。中山道の六十九の宿場のうち、ほとんどに本陣、脇本陣があるのに対し、善光寺西街道の本陣、脇本陣が両方ある宿場町は六つで半分以下に過ぎない。

この二つの点から次のようことが分かる。

中山道は五街道であり、大名をはじめとした武士の通行が多く、そのため本陣や脇本陣といつた施設が不可欠だった。また、通行量が多いことから、各宿場町は繁榮し人口や家数は多かつたと考えられる。それに對して、善光寺西街道は、松本藩の藩主である小笠原秀政が中山道洗馬宿と北国往還篠ノ井追分宿を結ぶための道として開設した道であり、街道と街道をつなぐ役割の強い「脇往還」である。これが、中山道に比べて規模が小さい大きな

理由である。

公用旅行者の通行は中山道よりはるかに少なく、幕府の巡見使や大阪、二条城番の諸大名がたまに通る程度であつた。参勤交代の大名通行はほとんど無かつた。とある<sup>3)</sup>。そのため、本陣、脇本陣といった施設の必要性もうすかつたと考えられる。逆に、善光寺西街道は善光寺参拝客の通行や、松平と善光寺平を結ぶ道として物資輸送の点において利用度が高く、一般客としての旅人は多かつたと考えられる。一つの宿場町の家数

に占める旅籠の割合が高いのはこのためである。

次に、善光寺西街道の宿場町の特徴である。善光寺西街道は参勤交代での大名通行など公用旅行者の通行が少なかつたため、本陣、脇普段は本陣や脇本陣でも一般旅行者を泊めさせて安定させることができず、多くの家では農業兼業であった。これが一つめの特徴である。

「参勤交代によつて大名が負担する費用は、  
 街道沿いの人々の生活を支えさせていたことが確  
 かです。加賀、前田家は一回の参勤交代で、  
 現在のお金に換算して二億円をばらまいたと  
 もいわれています。宿場にとつてみると、毎  
 年受け取る見込みのある定期収入として当て  
 にしていたはずです。参勤交代は街道の宿場  
 町を潤し、ひいては、街道を維持するために  
 重要なシステムがあつたということができます。  
 このことからも、大名通行

<sup>5)</sup>

かいがに宿場町の役入源であったかといふこと  
とが分かる。

二つめの特徴は、間の宿と呼ばれる正規の  
宿場ではない集落がいくつも存在すること  
ある。善光寺西街道の宿場町のうち、乱橋宿、  
西条宿、桑原宿の三つが間の宿である。この  
三つの間の宿すべくに共通していふことは、  
それぞれの峰と隣あつた集落であるといふこ  
とである。図13をみると次のようなことが分  
かる。もし、乱橋、西条の二つの間の宿がな

かつたら、会田から青柳まで二里超の道を二つの峠を越えて歩かなければならぬ。また、桑原宿がなかつたとしたら、麻績から稻荷山まで三里の道を峠を越えて歩かなければならぬ。実際に峠越えをすると分かるが、一つの峠を越えるだけでもそれなりに体力を使うのでが乾く。江戸時代の旅人も峠越えをしてた後には、茶屋に寄つて休憩をしたかつたはずである。すると、峠のふもとに茶屋や宿屋ができる。それが発展して間の宿として

機能するようになつたとも考へることができ  
る。つまり、間の宿は、宿場町と宿場町の間  
の距離の長いところや、峠など標高差の激し  
い道の前後に位置していたといえる。

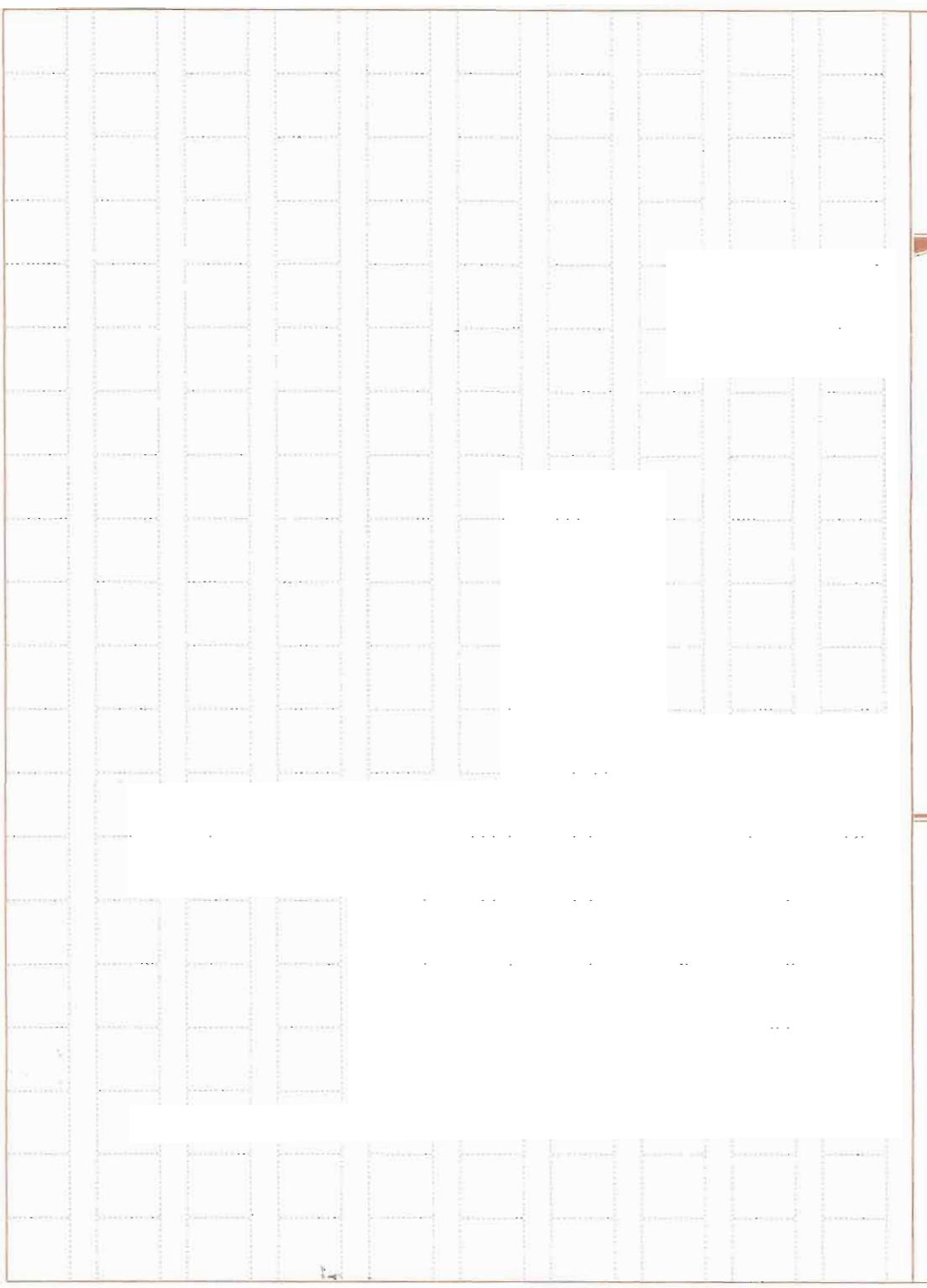
最後に、宿場町と宿場町の間の距離を中山  
道と比較してみる。善光寺西街道の宿場町の  
距離は図13の通りである。一方、中山道の宿  
場町間の距離は平均約二里である。このこと  
から、善光寺西街道の宿場町の間隔は短かめ  
であることが分かる。これは、善光寺西街道

が山合いなどころを通つていることと関係してゐる。江戸時代の旅人は一日平均十里歩くといわれてゐるが、洗馬から善光寺まで十九里二十六丁の道のりを旅人は三日間歩き続けたといふ。つまり、それほど善光寺西街道は厳しい道スリだつたと分かる。

このように、五街道にある中山道と比べて脇往還である善光寺街道は規模が小さく大名通行も少ない。また、宿場町の規模から考へると、公用旅行者以外の一般の旅人が夕く通

行したこと、農業兼帶の家が多いこと、間

宿が多いことが特徴である。



五、善光寺西街道と東街道の比較  
 善光寺西街道と東街道を、宿場町の規模、  
 構造、物資輸送の形態から比較し、それぞれ  
 の道としての性格について考える。

### 五一、宿場町の規模

まず、本陣、脇本陣の数を比較する。善光  
 寺西街道の宿場町にみられる本陣、脇本陣の  
 数は図12の通りで、本陣、脇本陣の両方がそ  
 ろつていた宿場町は半分以下である。一方、  
 善光寺東街道の宿場町にみられる本陣、脇本

陣の数は図14の通りである。善光寺東街道の宿場町のうち、間の宿である篠ノ井追分宿を除く全ての宿場町に本陣があり、大半の宿場町には脇本陣があった。つまり、本陣、脇本陣など公用の宿泊施設の数は、善光寺東街道の方が多いといえる。

次に、各宿場町の大きさを比較する。図15に各宿場町の大きさを表した。その通り、善光寺東街道の宿場町の大きさは善光寺西街道の各宿場町の二倍近くある。

最後に、宿駅間の距離を比較する。善光寺西街道の宿駅間の距離は図13、善光寺東街道の宿駅間の距離は図14に示した。善光寺西街道の平均が一里十二丁であるのに對し、善光寺東街道の平均（合宿）は田中宿（海野宿間を除く九区間の平均）は二里二丁と二倍近く長い。理由として、善光寺東街道は山合いを通じおらず、峠がほとんどないこと、間の宿が少ないとなどが考えられる。また、

善光寺東街道の宿駅間の距離の平均は、中山

道の平均約二里とほんと同じ値である。

これらのことから、宿場町の規模や宿駅間の長さでは、善光寺東街道は五街道に近い性格を持つことことが分かる。

## 五一二、宿場町の構造

鍵の手、舟形の有無を各宿場町で比較する。

鍵の手とは、道が九十度近く鍵の手状に曲がることであるところのことである。また、舟形とは、本来は城を防衛するために城門に設けられたもので、図16のように道が連続して曲が

つていろところをいう。どちらもたいてい宿

場町のはずれに置かれた。

善光寺西街道の宿場町にみられる鍵の手、  
舟形を図17に、善光寺東街道の宿場町にみら  
れる鍵の手、舟形を図18に示した。鍵の手が  
みられる宿場町は、善光寺西街道では、村井  
宿、松本宿、川谷原宿、西条宿、青柳宿、麻  
績宿、桑原宿、稻荷山宿があり、善光寺東街  
道では、海野宿、小諸宿、上田宿、坂木宿、  
上戸倉宿、丹波嶋宿である。一方、舟形がみ

られる宿場町は、善光寺西街道では、洗馬宿と岡田宿のみであり、善光寺東街道では、田中宿、坂木宿である。ただし、追分宿、海野宿、上戸倉宿、下戸倉宿、丹波鳴宿にも当時は柵形があつたといふ。

これより分かることは、鍵の手は善光寺西街道の宿場町に多く、柵形は善光寺東街道の宿場町に多かつたということである。また、ほとんどの宿場町には柵形か鍵の手のどちらがあるものの、善光寺西街道の郷原宿には

どちらもなかつたことである。それは、郷原本宿には正規の本陣や脇本陣がないからである。本来、柵形や鍵の手は宿場町の防衛機能の人とつであり、本陣に宿泊している大名を守るために設けられたものである。そのため、本陣がなく、大名が泊まることのない郷原宿に鍵の手や柵形は必要なかつたと考えられる。また、江戸と各地を結んでいる五街道では、ほとんどの宿場町に鍵の手や柵形が設けられていた。このことから、鍵の手、柵形は、本

陣を守るためだけではなく、万事の際に江戸を守る役割があると考えられる。具体的には、街道を通つて敵軍が攻めてきたときには、鍵の手や舟形で敵の進軍を遅らせることができる。乙は、なぜ善光寺西街道では洗馬宿、岡田宿にだけ舟形があるのか。二つの宿場町に共通することは、江戸へ通じていることと、参勤交代での大名通行があつたことである。洗馬宿は、善光寺西街道の起点もある。そのために、中山道の宿駅もある。

江戸の日本橋とつながつていた。また、岡田宿は松本藩の参勤交代で大名の通行があつた宿場町であり、図19のように保福寺道を通じて江戸とつながつてゐる。つまり、柵形は各宿場町の本陣の護衛、また、江戸を守るために意図的に設けられていたことが分かる。

善光寺東街道の宿場町に柵形が多いのも同じ理由である。善光寺東街道は北国往還の一部であり、北陸地方の大名が参勤交代で通行した道である。(図20参照)また、追分宿か

ら中山道を通して江戸とつながつてゐる。

最後に、善光寺西街道の宿場町に鍵の手が多い理由である。これは、もともとは城下町だったところを宿場町に転成したケレスが多く、これが理由に挙げられる。もともと城下町だった宿場町は善光寺西街道には以下の六つである。

### (1) 村井宿

フ中世には西隣の小屋地区に村井氏が居住していたので、宿付近も城下町であった。

かと思われる。とある。

(2) 剣谷原宿

「鎌倉時代には東信濃の海野氏と同族の  
剣谷原氏が近くの山へ城を築いている」と  
あり、<sup>6)</sup> 城下町であったことが考えられる。

(3) 会田宿

「鎌倉時代にこの地方を領した海野会田  
氏の城下町から発達した宿場である」とあ  
る。<sup>6)</sup>

(4) 青柳宿

る。<sup>6)</sup>

「戦国時代に青柳氏が居館を長田から清長寺付近に移した時、街道を居館前まで引き上げて侍町を作った」とあり<sup>6)</sup>、城下町を転用していることが分かる。

(5) 麻績宿

「戦国時代には、麻績服部氏の城下町と「乙斐達」したといふ。」

(6) 稲荷山宿

「天正十年（一五八二）三月より織田信

長公御領分に相成り、同年七月より信濃國

(川中島) 四郡上杉景勝公御領分に相成り、其節同年上方押とて當所へ新砦相立、右に付其町割出来右町割繩張之内へ白狐飛込之により地名を稻荷山と号す。(口村方旧記書抜)<sup>6)</sup>とあり、城があつたこと、が分かる。

つまり、善光寺西街道の十ある宿場町(間の宿を除く)のうち、半分以上が城下町であつた。さらに、松本宿は街道當時も城下町であつた。その松本宿をみると、鍵の手は宿内に

四ヶ所もある。

このように、城下町を転成した宿場町には鍵の手が多いと考えられ、善光寺西街道の宿場町はその典型といえる。

### 五〇三、物資輸送の形態

ます、善光寺西街道の宿場町間の駄賃をみる。図21に郷原宿からの駄賃、図22に川谷原宿からの駄賃、図23に青柳宿からの駄賃を示した。距離がほとんど変わらない洗馬と郷原と岡田と川谷原の駄賃を比較すると、本馬は

郷原から洗馬まで五十六文なりに對し、岡田  
 から刈谷原までは一五八文である。岡田より  
 刈谷原の駄賃が約3倍高いのは、刈谷原峠を越  
 えなければならぬからだと考へられる。こ  
 のことから、峠を越す場合など標高差の激し  
 い行程の駄賃は高かつたことが分かる。また、  
 距離が長い程駄賃も高かつたといえる。駄賃  
 をみると分かる通り、山合いな道の多い善光  
 寺西街道は、物資の輸送の大変な道であつた  
 といえる。

次に、善光寺西街道を通じてどのような物資が運ばれたのか。善光寺西街道をみると、松本宿を通った物資は、宿場機能の中での移出関係で主となるものは木材で、慶長、元和の頃から飛驒、島々方面からの檜木、板、白木などだが、保福寺崎から江戸、関東方面に送られたり、西は名古屋、大阪方面まで送られていた。(中略)三州街道から東海方面に送られるものには、麻、葛たご、殻類等があり、移入されるものとしては、伊那方面から茶、

綿などが、糸魚川方面から食鹽、海產物などが、それどれの問屋をとおして取引きされた。とある<sup>3)</sup>。また、青柳宿の問屋を通つた物資を

図24に示した。これをみると会田、松本方面

へはたばこ荷が、麻績、稻荷山方面へは茶荷がすばぬけで多いことが分かる。このことから、たばこ荷は善光寺方面から松本宿まで運ばれ、松本から三州街道を通つて東海地方に運ばれたと推測できる。また、茶荷は伊那方

面から善光寺西街道を通つて北信地方へ送ら

れたと考えられる。このように、善光寺西街道の物資輸送の特徴として、多くの街道の起點となる松本宿を中心に、様々な方面からの物資が運ばれたことが考えられる。

では、善光寺東街道ではどんな物資が流通したのか。この物資は越後から信濃、関東方面へむけ乙は、塩をはじめとして鮭、鰯、鱈、四十物、銑鉄、干物、真綿、八講布、麻布、加賀笠、米などがあり、越後への移入品としては、煙草、木綿、織綿、大豆、小豆、大麦

小麦、蕎麦、草種、胡麻、油糟、白草、金引、紙、塗物、松茸、栗、柿、胡桃、辛子などがあつた。とある<sup>3)</sup>。越後からの移入品の中では鮭、鰯、鰐、干物など、の海産物を除くほとんどの物資は上州、江戸方面へ運ばれたと考えられる。一方、海産物は、信濃が内陸の国であり、重要な物資であるため、信濃国内で消費されたと考えられる。これらの海産物があるが、善光寺東街道では上田、小諸など東信地方に、中、南信地方には、糸魚川から子国

街道を通り、松本を経て運ばれたと考えられる。

また、これらの物資の他に、善光寺東街道は佐渡<sup>ヨ</sup>とれた金銀を運ぶ道<sup>ヨ</sup>もあつた。金銀は幕府の重要な財源<sup>ヨ</sup>もあり、そのため、老中証文による無貨<sup>ヨ</sup>の継ぎ立てが行われ、御用荷物として他の荷物に優先して運ばれた。その金荷の輸送量について、『北国街道上田宿海野町問屋日記』に次のよう記載され  
ている。『佐州御運上金銀六十九貫六二三匁

七分、小判六十四両、出雲崎四月二日御発出、  
同五日の晩矢代御泊、六日昼上田御休、同晩  
小諸御泊。御金荷付馬三十七ひき、駄荷馬九  
ひき、乗かけ馬十一ひき入申候。」とある。<sup>7)</sup>  
一回の継立に必要な人馬は五十七疋があり、  
善光寺東街道の各宿で常備している二十五疋  
の伝馬を大きく上回る。そのため、一宿での  
継立が困難であり、隣の宿場、あるいは数宿  
が合同で継立を行つたといふ。元禄期の金荷  
の輸送回数は二十六回、一年間で平均一、五

回、多い年には三回あつた。しかし、慶長十八年から元和九年までの上納銀の平均が元禄中期の約三、六倍になつていて、ことから、江戸中期には元禄期の五、六倍の金荷が輸送されたと考えられ、金荷の継立が各宿にとつて大きな負担となつていたといえる。善光寺東街道では、矢代、上田、小諸宿で金荷輸送の一を行の宿泊が行われ、善光寺、丹波鳴、坂木、海野、追分宿で金荷の付け替えが行われたといふ。特に、宿泊地では一〇〇人の人足によ

る徹夜での警備体制が敷かれたという。

これらのことから、善光寺東街道の物資輸送の特徴は、北国往還を通して、越後、信濃、江戸と一定の地域間で物資を運んでいるといふことである。また、金荷などの公用の荷物が多く運ばれたことも特徴である。

最後に、物資の流通量に注目する。善光寺宿の問屋を通った荷物の数を図25に、稻荷山宿の問屋を通った荷物の数を図26に表した。どちらも、追分、洗馬方面の荷物が圧倒的に

多いことが分かる。このことから、善光寺街  
道は越後から運ばれた物資を信濃、江戸方面  
へ運ぶ役割が強かつたと考えられ、北から南  
への輸送路であったといえる。

## 六、信仰の道としての特徴

善光寺街道とはその名の通り善光寺参拝客の通つた道である。そのため、街道や宿場町にも信仰の道としての特徴がみられる。

一つめは、道祖神、馬頭観音、常夜燈などの石仏が多くみられることがある。道祖神とは、主に無病息災を願う神であるが、集落の端におかれ村の守り神として民衆の間で信仰された神様である。後に街道にも置かれるよ

うになると、旅の安全を祈る「道の神様」と

して信仰された。馬頭観音とは、主に交通安全を祈るものであり、道中で七ヶ所の馬の供養のために街道に置かれた。常夜燈とは、信仰や供養を兼ねて旅人の目標物として建てられたものである。  
 (中略) 街道は分かれ道、宿場の入口に建てられていたことが多く、道標の役目を果たしていた。とある<sup>4)</sup>。これらの石仏の個数は善光寺西街道の方が圧倒的に多い。理由はいくつがある。一つは、山岳信仰と関連しており、山合いの宿場町の

多い善光寺西街道で信仰が盛んであつた可能性がある。二つめは、馬頭観音に限つて考えれば、峠などでの険しい山道の多い善光寺西街道の方がつくられやすかつたと考えられる。旅の途中で馬が亡くなるのは、多くが山道である。そのため、馬の供養塔である馬頭観音は峠に多くみられる。

次に、善光寺街道周辺に信濃三十三番札所にある寺が多いことも特徴である。三十三の札所のうち、善光寺西街道沿いに十二ヶ所、

善光寺東街道沿いにも十二ヶ所の札所が存在する。また、三十三の札所の他に客番と12善光寺も札所となつてゐる。そのため、三十三ヶ所の札所として旅人が善光寺街道を通行したこととも考えられる。

番所が多いことも信仰の道としての特徴だと考えられる。善光寺街道には幕府の定めた門所はないが、各藩の定めた番所がいくつも存在する。これらの番所は、米、塩、材木などの物資の出入りも取り締めたが、共通して

女性の通行を改めた。村井宿には女通行手形  
かいくつか残つてゐるといふが、そのうちの  
一つに次のようなことが書かれてゐる。

通り手形之事

一此廿壱人善光寺へ仏詣仕候、  
御番所無相違御通し被成可被下候、  
為其仍如件、

享保十六年子ノ六月十日 弥右衛門

村井口

山村五兵衛様

当時の善光寺参拝客は女性の方が多かつたとされる。そのため、善光寺参りの女性客の通行が盛んび、女改めのための番所も多かつたと考えられる。

石仏の数、番所の数は善光寺西街道の方が多い。さらに、善光寺東街道は慶長十六年までには善光寺宿を通らないルートが本道だつた。これらのことから、本来、信仰の道があつたのは善光寺西街道だと考えられる。

## 七、結論

善光寺西街道は、もともと城下町だった宿場町が多く、交通の要所を押さえた街道である。また、松本宿を中心にして多くの街道とつながっており、物資輸送の面では、善光寺と、中信、南信、東海地方、上方の各地を結ぶ街道であった。また、本来は信仰の道であり、各地からの通行客が善光寺へ向けて多く通った。

善光寺東街道は、五街道に準ずる規模を持

つ街道である。北陸地方の大名の通行、金荷の継立など、江戸への輸送が多く、公用旅行者、公用荷物の通行が多かつた。また、江戸から善光寺へ向かう旅人が通つた。

これらのことから次の結論が言える。善光寺街道の中でも西街道は、善光寺と様々な地域を結んでゐるのに對し、東街道は善光寺と江戸のみを結んでおり、これが、大きな相違点である。

## 八、参考文献

- 1) 善光寺道名所図会・豊田庸園・臨川書店。
- 2) 街道と宿場・信州歴史の道研究会。  
信濃毎日新聞社。
- 3) 歴史の道調査報告書・長野県教育委員会。  
長野県文化財保護協会。
- 4) 信濃路をゆく(上)・児玉幸多・学研。
- 5) 長野市民新聞・二〇〇九年十月三十一日

(土)

6) 信濃路をゆく(下) 水玉幸多 学研.

7) 信州小諸城下町と北国街道小諸宿.

塩川友衛 信毎書籍出版セニタ!

他 街道の日本史 25 北国街道 古川貞雄.

吉川弘文館.

善光寺道を歩く 傳田重義 東峰書房.

長野市とその周辺地域の街道史.

長野市教育会.

## 九、訪れた施設

都立中央図書館

豊島区立日白図書館

県立長野図書館

松本市立中央図書館

長野市立南部図書館

追分宿郷土館

海野宿資料館

中山道六九次資料館

坂木ふるさと歴史館  
稻荷山蔵(館)

聖博物館

